

---

## 概 要

---



## 概要

### 1 調査の目的

昨今の情報媒体の多様化や普及に伴って、科学技術情報をはじめとする様々な情報の情報源や入手経路が多様化していることから、情報の正確性や客観性の確保、情報受容者の属性に合わせた適切な情報の発信方法等についての議論が不可欠であると考えられる。また、このような情報過多の時代において、若年層が自らの進路を決定する際にどのような要因を重視するのかが非常に興味深い。

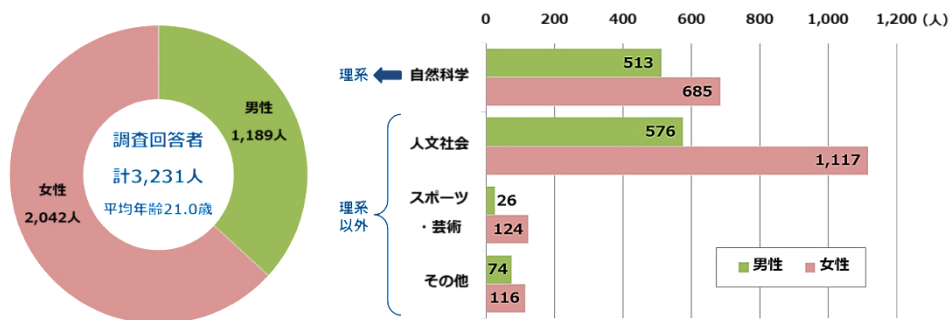
本調査は、我が国の次世代の科学技術を担う若年層(大学学部生)における科学技術に対する興味関心の有無、科学技術情報の日常的な情報源及びその信頼性に関する意識や科学技術の基礎的概念の理解度、並びに進路選択に関する意識等を把握することを目的とするものである。

### 2 調査対象と調査方法、調査項目等

2016年3月11日～2016年3月22日、インターネット調査会社(株式会社クロス・マーケティング(保有モニター数:約180万人))の保有する登録モニターの内、日本国内の大学学部課程に在籍する学生で、18歳以上30歳以下の全国の男女(性別はインターネット会社に登録のものとする)を調査対象とし、インターネットを利用したアンケート調査を実施した。調査内容は、科学技術に対する興味関心の有無、科学技術情報の日常的な情報源及びその信頼性に関する意識、科学技術の基礎的概念の理解度、並びに進路選択に関する意識等についての諸項目である。

### 3 結果

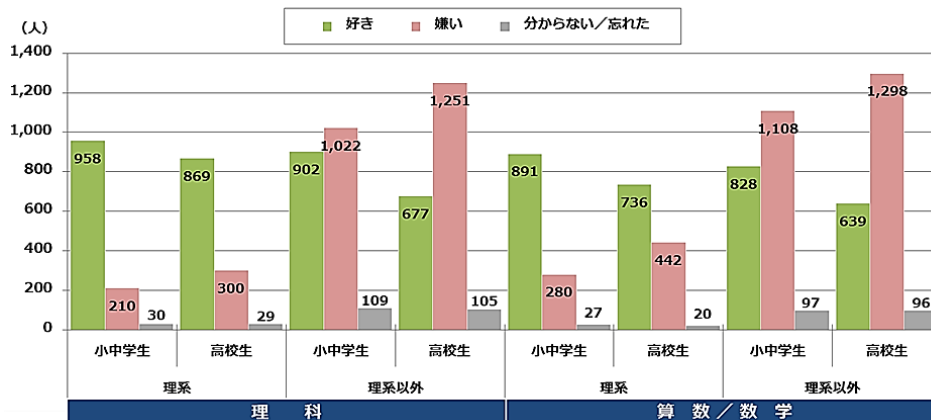
日本国内の大学学部課程に在籍する学生で、18歳以上30歳以下の全国の男女3,231人(男性1,189人、女性2,042人)より回答を得て集計・解析したところ、以下のことが明らかとなった。



概要図表1 調査回答者の属性

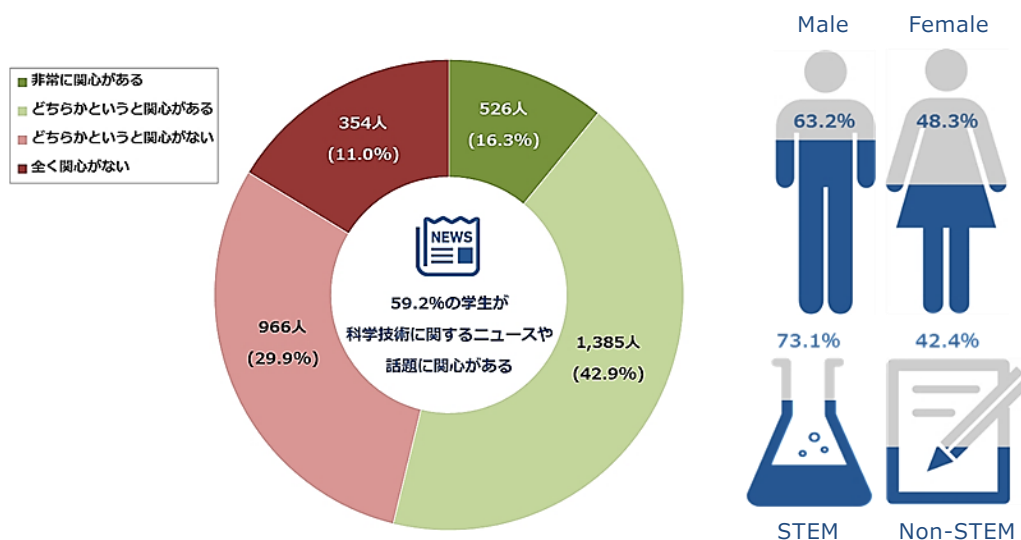
#### 【大学学部生の科学技術に関する情報に対する意識と情報源について】

- 大学での専攻が理系の学生は、小・中・高校生の頃に理科や算数／数学が「好きだった」と回答した割合が「嫌いだった」と回答した割合よりも高かった。一方、大学での専攻が理系以外の学生は、小・中・高校生の頃に理科や算数／数学が「好きだった」と回答した割合が「嫌いだった」と回答した割合よりも低かった。



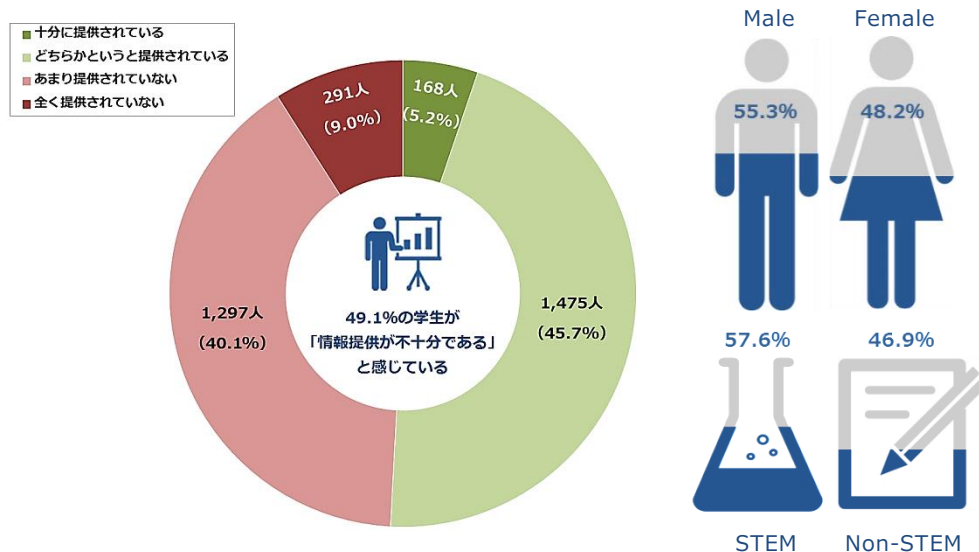
概要図表2 小・中・高校生時代における理科、算数/数学に対する意識（大学における専攻別）

- 科学技術情報に「関心がある」と回答した学生は 1,911 人 (59.2%) であった。男女別では、男性の 63.2%、女性の 48.3% が「関心がある」と回答しており、男性の方が科学技術情報に対する興味関心が高い傾向にある。また、専攻別では、理系の 73.1%、理系以外の 42.4% が「関心がある」と回答した。



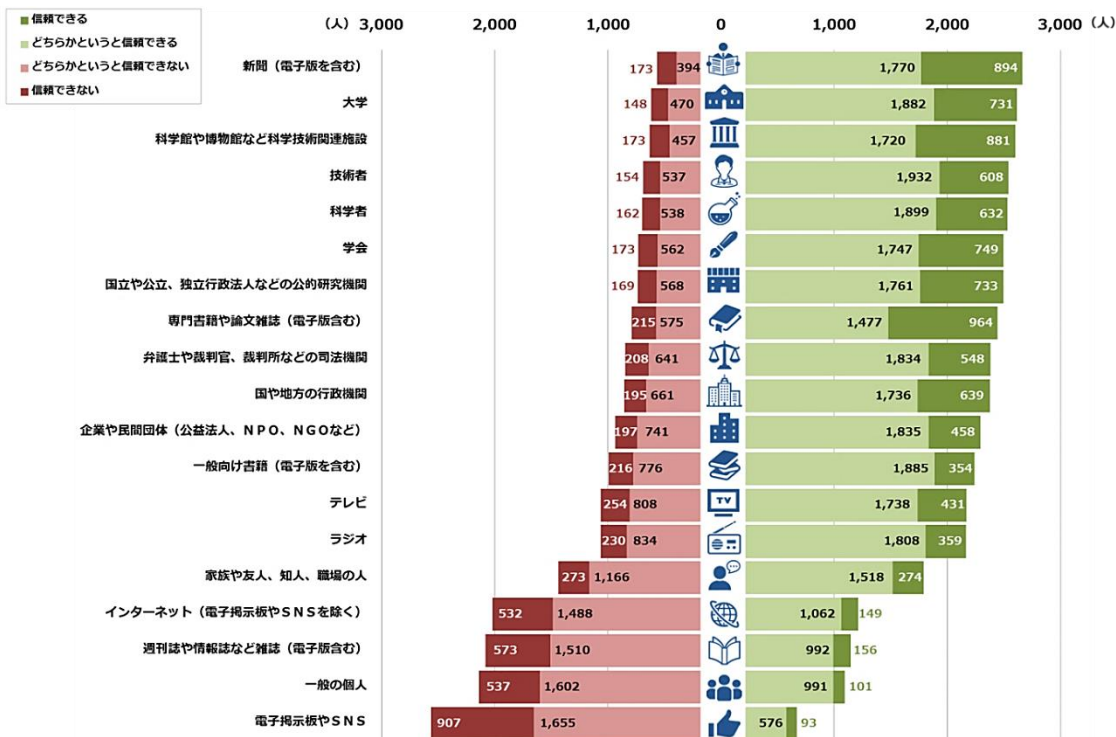
概要図表3 科学技術情報に対する興味関心の有無

- 科学技術情報が「提供されている」と回答した学生は、1,643 人 (50.9%) であった。男女別では、男性の 55.3%、女性の 48.2% が、また、専攻別では、理系の 57.6%、理系以外の 46.9% が「提供されている」と回答した。



概要図表 4 科学技術情報の提供に対する満足度

- 最も多くの学生が信頼できる科学技術情報源として選択したのは「新聞（電子版を含む）」であった。ただし、これは「信頼できる」と「どちらかという信頼できる」の合計であり、「信頼できる」とする回答が最も多かったのは「専門書籍や論文雑誌（電子版含む）」である。一方で、最も信頼性が低かったのは「電子掲示板や SNS」であった。

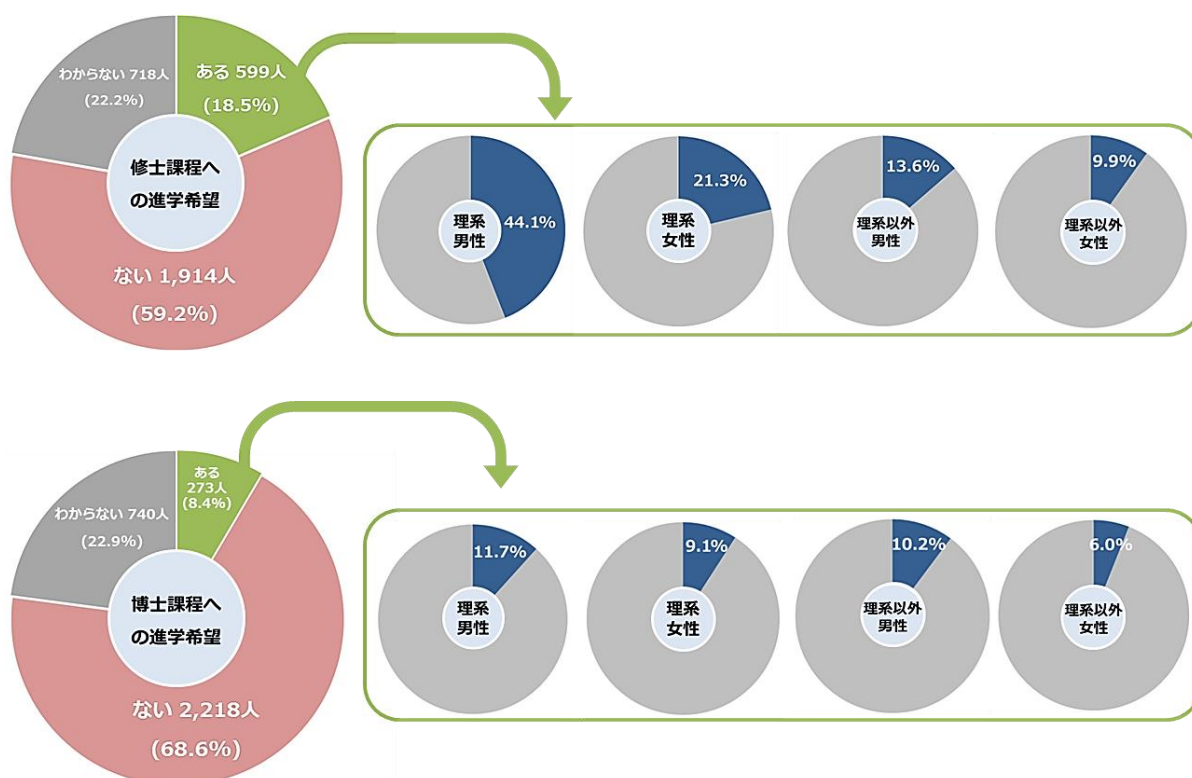


概要図表 5 科学技術情報源とその信頼性に関する意識

- 学生が日常生活を送る中で科学技術情報を取得する際に最初の情報源となる「最初の情報源」として最も多く選択されたのは、テレビであった。また、最初の情報源で取得した情報について更に詳しく調べる際に用いる「深掘り情報源」として最も多く選択されたのは、インターネット(電子掲示板や SNS を除く)であった。
- 科学技術の基礎的概念の理解度についての 14 問の平均正答率は 56.0%であった。男女別の正答率については、医学的要素を含む問いにおいては女性の正答率が高く、物理学的要素を含む問いにおいては男性の正答率が高い傾向が認められた。また、専攻分野別の正答率については、全ての問いにおいて理系の正答率が高かった。

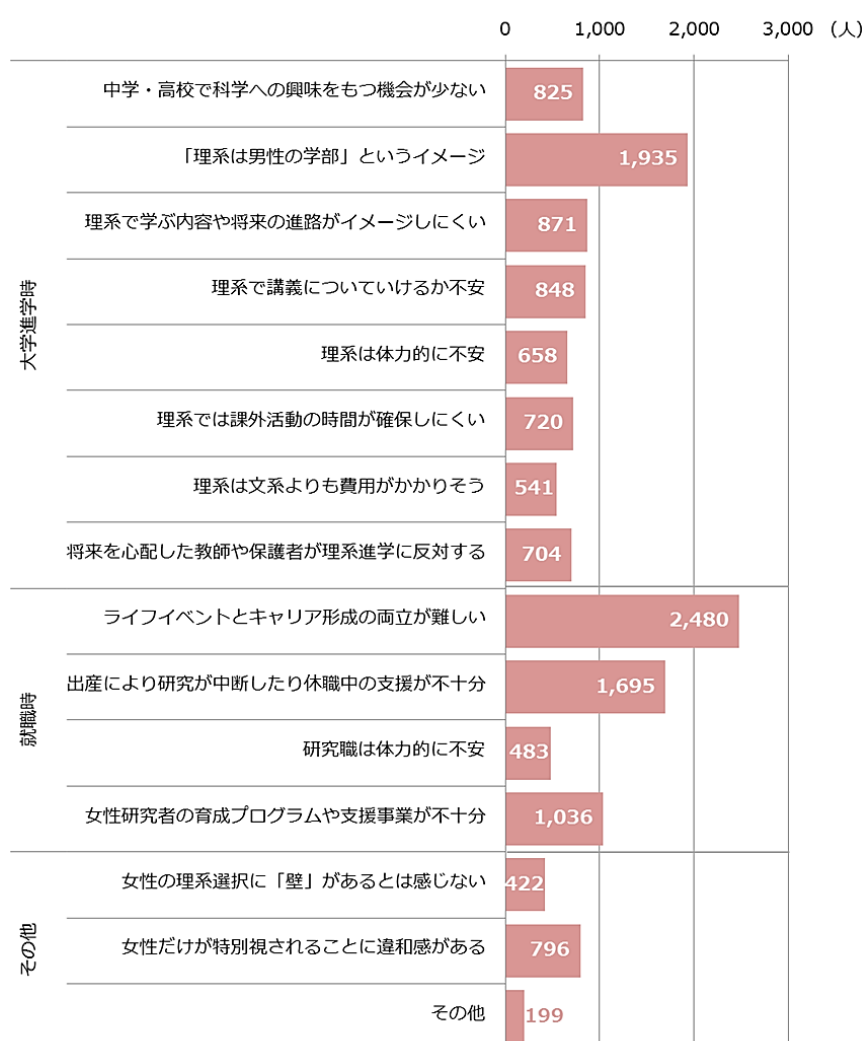
### 【大学学部生における「留学」「進学」「就職」「女性の理系選択」に対する意識について】

- 短期留学(3ヶ月以内)と長期留学(3ヶ月を越える)の希望の有無を尋ねた結果、長期留学の希望者の割合は、理系よりも理系以外の学生で高い傾向にあった。
- 大学進学時における進路決定要因(7項目)について尋ねた結果、理系女性は他の群と比較して、保護者の意見、卒業後の就職への有利性、資格や技術の習得可能性の有無を進路決定要因として特に重視する傾向が認められる。
- 修士課程・博士課程への進学に対する意識について尋ねた結果、理系学生(特に理系男性)では、理系以外の学生に比べて修士課程への進学を希望する学生の割合が高かった。



概要図表 6 修士課程・博士課程への進学に対する意識

- 将来、就職先を決める際の決定要因となり得る7項目に対する意識について尋ねた結果、理系の学生は、専門性の活用、安定性、収入を考慮要因として重視する傾向が認められた。加えて、理系女性は他の群と比較して、進学時の進路決定と同様に保護者の意見を重視する傾向が認められた。
- 女性の理系選択の「壁」と思われる要因を尋ねた結果、最もポイントが高かったのは、「ライフイベントとキャリア形成の両立が難しい」であった。博士号を取得する場合には、取得後のキャリア形成の時期と結婚・出産・育児等のライフイベントが重なる場合に、博士号を取得しても、「キャリアか出産か?」という二者択一を現実的に迫られることを多くが懸念していることが現状であろう。加えて、大学進学時点で「理系は男性の学部」というイメージが深く根付いていることも明らかとなった。



概要図表7 女性の理系選択に対する意識（複数回答可）